1977・4

# 通信・おなご・4

発行・岩手県北上市青柳町二丁目6-44・小原麗子

## 話すすてろ

・「こりゃ、この人おべたべ」って高峰先生言うけモノ。おぼんだべって言われでも見だごどねがっただを。わがらねェって言ったノス。

「わがらねえずごどねがべじゃ。カヤラおべたべ」っていうけモノ。カヤラっていう人、小学校の時の同級生だったノス。「そごの家のおんちゃよ」って言うけモノ。「勝郎さん知らねェが」って言うけモノ。知らねえって言ったノス。あっちだってわたしのごど知らねんだ。

「あや、オラ、とにかく家がら頼まれだのもらってぐすてえ」って言ったえば、「ウン」なんていうて、新聞紙さ包んでこだれだような物寄ごすようでよごさねえ。そしていぎなり

「うなだ、ここで話すすてろ」って行ってさんたノス。あんや、なんたら、話しせって言われだって。しょすす、知らねえ人だすなんにも話しせねがら黙って、こうやって下むいでらノ。すたえばなサ。相手の人なサ。満州の話しするけをすや。

オラ、いっこうそずなさ、本気になって聞いでねだモノ。なあに満州などなにすたずてや。オラ

だ学校さ勤められるように頼んでらのだを／。家がら餅でも頼のまれできたのだらばとんず早く持ってって寮の皆さ食せたりすねぇねどばり、その気ばりすてらだをすや。

**鉱山の話し**　・としたら、こんど鉱山の話しするだけモノ。日立にもそれごと有名な鉱山ある／ス。その鉱山さ実習に來たごともあるが、鉱山さ行ったごとあるがって聞ぐけモノ。

　恥場の人でその鉱山の近ぐに家あって一ぺん連れてってもらったごとあるノ。煙突の傍のあだりの家でそこまでは行ったごとあるって言ったえばその煙突のある所が鉱山で実習に來たった。どがってす……。あや、なにのごとだが、えっこうわげわがねぇ……。そのうずに

「話しすだが」って、高峰先生上って來たけを(笑)あや、話すたって、默ってらオラは……。「まず行ぐ」って言ったんちゃ。すたえばあの先生も、ちゃかちゃかすがらス。

「じゃ、勝郎、オラも家さ行がねがは……」って、こう言うだけをハ……。

「あの……行ぐてがは……」Lどがって、相手の人言うたえば「行ぐべじゃは、なにやLいま行ければ、何時のなあるじゃ、まにあうべじゃどがすたてス。うじゃ、一緒に出はるじゃどがってス。

**ビールビン**・足痛いどがって、冷すどがって、ビールビンど日より手拭いど一緒に持って歩いてなサ。どだり、ビジャビジャど、この膝カブ冷すて……（笑）そしてなサ、勘定すさ行ったりすたんだがなんだがス。その家がら持ってきた物、えっこう寄ごさねぇだモノ。いよいよ帰る時になって、「ホレ、こず」ってよごすたの見だえば、ふどうたったノス。こだれたようなふどうス。家でふどう寄ごすはずねぇどもおがすなあ……。ど思って、まず仕方ねぇよごすたのなんだなど思ってそしてまず一緒にとご出だノス。

　一回会ったきりで、良も悪りと、手紙もらっただげス。ただネ、家には行ったごともあるノ。カヤラさんという人と友だちだったもんだがら……。

**栄養失調**　・満州に就恥したわげス。家ごは不

（夫になった相手）盛岡の高等工業のネ、採鉱科を出だわけス。二十八歳になってから卒業したのだがらネ。その間、満州さ行ってらっただス。祈居さんだちと一緒に開拓をしようど思って行ったのだったずがら。開拓民として向うで骨を埋めるつもりで、こんな狭い所じゃなくのびのびと自分の気持をたくしてやろうど思ったのだずがらネ。

とごろがやっぱり耐えられねがったどすや。家に居で嫁せいだ人でもねえたス。気持はがりどう思ったたて……。まるんでネ・栄養失調みでえになって……。

小原照子さん、知ってるでしょ。あの方のお父さんの所へ行って働いたのだったどス。未開地に行ってやるのだもの、非賊も出るしねえ。それでも気持が気持だがら、がんばってネ。カラス汁だったずんちゃ。えずだが煮たの見だけえ、カラスのウンコだったど鍋の底が。もう鳥目になってさんて、目が見えなくなってさんただど。栄養失調で。それでも皆は丈夫だったんだネ。

とってもわがなくて、加藤忠吉さんていう方の所へ行ったらネ・とっても無理なんだがら、おめえはなにも学校出でれ、そういう仕事でなくてもやって行げるんだがらってネ。あの人は満鉄に行ってすごぐえくて居だんだどス。

## 資源開発・

それで、早く言えば、県庁みたいな所に入ってネ。それでもどうしたって開拓のごどはすてれねえから、そういう方面のごどやろうどして、大豆。満州は大豆がうんと穫れるからその勉強やってるうちに、満州は資源が豊富だど。それでネ、戦争中だし勉強して資源開発をやった方がえんど思ってなサ。働きながら勉強したんだス。二十五になってから、盛岡の高等工業の採鉱科に入って、その間に応召になって兵隊に行って、二十八歳で卒業したわけス。満州おぼえでるから、満州に就職したわけだども、こんど移住するには年も取ったす、早く嫁もらわねばねったって家の人たちはいうべす、自分もそう思うたなサ。

あっちは急いでらべども、オラわがねェだモノ。三月に日立の方やめで帰って来ても、満州に行ぐなどまだ思ってもえねがったんちゃ。へつづく〉

へ和賀町藤根・加藤アツ子さん・53歳・談〉

# 知覧の昔話

## 初むこ

No.4

むかし、タカ菜漬けの好きな男が、嫁をもらったど。

何日かたって、里帰りに行くことになり、嫁さんと初むこは、二人仲良く、出かけたど。無事、嫁の実家に着いて、どうにか挨拶もすみ、食事だったど。

そして大好きな、タカ菜漬けも、ごちそうになり、日も暮れ、夜になったので、床に休んだど。

そしたら、むこ殿は、嫁さんに、「昼、ごちそうになったタカ菜漬、うまかったな」と、言ったど。嫁は、「そんなら、水屋の隅にあるから、行ってこいよ」と、言ったど。むこ殿は、起きて水屋に行き、タカ菜漬桶のそばに、ツッツクはって、おびしろはだかで、たらたらと汁のしたたる、タカ菜を取って、食い始めたど。うまいうまい、夢中で食ったど。

タカ菜の汁は、塩からい水で、ダラダラと胸を流れ、腹を流れ、へそを流れ、その下まで濡れでったど。

よほど食ってから、ああ、うまかったと言って立ったど。そして、へその下から、塩からい水のしずくが、たってしるのも気づかずに、床に行って寝て見たら、だんだん、へその下が、かゆくなって、かゆくなって大変だったど。

かいたり、こすったり、かいたり、こすったりしたら、へその下の物が、ふくれてふくれて、大きくなったど。

むこは、困って、嫁に聞いたど。嫁は、「そんたら、ろばたに鉄瓶あるから、その中に入れて、洗って見ろ」と、言ったど。

早速、ぬるま湯に入れて、こすったところ、ずまげた、ふくれて大きくなり、鉄瓶からとれな

くなったんだど。

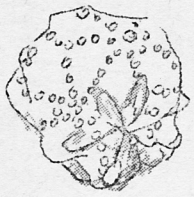
また、嫁の寝てる所に行って聞いたら、今度は、「とんだら、家の下の方に、清水があるがら、そこの処に、行ってみろ」と言ったど。

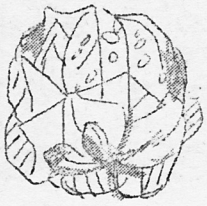
むこ殿は、そうかそうかと、服に、鉄瓶をぶらさげて、下の清水を探しに行ったど。ようやく、清水を見つけ、鉄瓶をつけたまま、水に、バタッと、ぬだばったど。

冷たい水で、体まで寒くなったど。そして、ぶるぶる震えるようになったら、とっくり、鉄瓶はとれたど。

むこ殿は、よかったと、震えながら家に帰り、床の中さ入り知らん顔で、寝でらけど。

朝になって、家の人たちは鉄瓶がない、不思議だ、昨夜、寝る前まで確かに、台所にあったんだが、と言って探してらっけど。





嫁は、それを聞いて

「むこさんは、占いする人だから、ちょっと、聞いてみるとんがんべ」と言うので、家の人達は、「それはまた、よい事、覚えだごと」と言って、早速、占ってもらったど。

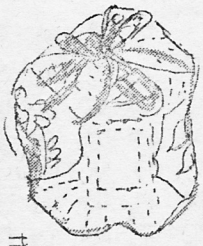
むこ殿は、知らん顔で、ちょっと、考えたふりして、「なんでも、家の下の方角で、水の辺にあるようだな」と、言ったけど。

早速、行ってみたら、清水のそばに、間違いなくあり、すいぶん、占のあたる人だと、たまげて、ほめられで、無事、里帰りも済まして、やすまげた事も、難のがれで、帰ったどさ。

とんとはれ。

語り手・石川ツナヨ（七十五歳）沢内村大野

再話・武田礼子



◎武田礼子が、『わがのむかしばなし』第二集を発刊いたしました。第一集同様にご愛読を！

■和賀の昔話が大変に面白く、イソップ物語などお説教の匂いが強く、民家弾圧の話に思うのですが、和賀の話は、そうでありません。農民の気高さが伝わっているように思うのです。

現代民話（「橋を渡る日々」）の語りも独特のことで、積ってゆけば現代農民史となりましょう。農民の香気として楽しく読ませていただいています。

盛岡市緑ヶ丘三の十二の四七・石川武男

■『おなご』三号ありがとうございました。

「語りことば」が魅力です。「話しことば」ではなく「語りことば」です。

和賀の「おなご」が着ぶくれて、語る姿に感動しています。

水沢市中田町三の五・南川比呂史

■「和賀の昔話」、毎号、とても面白くよみました。いわての方言が、また、たまりません。あたたかい味があっていいですね。私の祖母は、こういう昔話をたくさん知っていて、私が小さい時、泊りに来ては、話しをしてくれました。せんそく持ちの祖母に「もっと話せもっと話せ」とせがんで母に叱られたこともありました。祖母は、芝居や小説が好きで本ばかりよんでいて「ダメなヤツ」といわれていたそうですが、私は祖母が大好きで、泊りに来るのを楽しみにしていました。

祖母のふとんにもぐり込んで話しを聞いたことが思い出されます。同じ話しを何度聞いてもあきずに。たのしい思い出です。

福島市丸子字御山越弁の内・川崎タツ工

■こちらは、花の季節です。梅の花の散りせぬうちに、サクラ、スイセン、レンギョ、ユキヤナギ、モモ、山吹き、リンゴの花々が、日もあかずに咲き出します。さくらまつりのポスターも、あちこちに貼り出されました。この地にはさくらの名所もあります。ポスターには、『北へ向って』と刷りこまれて、目に付きます。国鉄のキャッチフレーズは、『美しい日本』から、『北へ向って』と、衣替えしたのかもしれません。

そういえば、都はるみの『北の宿から』（8頁）

あとがき

■「和賀の昔話」、毎号、とても面白くよみました。いわての方言が、また、たまりません。あたたかい味があっていいですね。私の祖母は、こういう昔話をたくさん知っていて、私が小さい

# 橋を渡る日々—4

## 財産あらそい

X月X日

眼鏡をかけて、髪の毛がいくぶん波打っている男が、窓口の椅子に腰かけている。農作業をやっている風でもないから勤人なのだろうか。用事があるのか立つ気配もない。

土曜日は午前中で窓口がしまる。しめる矢先にやってくるお客さんはありがたくない。貯金をしてくれる人でもありがたくない。支所相応の現金の持ち越し額というのが定められてあって、それ以上の額は本所に逆送しなければならない。所定の時刻が過ぎれば、信連か銀行に直接持ってゆかねばならない。持ち越しの現金はビルメンが取りに来る。ビルメンは十二時十五分頃にやってくるので、その間に現金を数え、きょうの取りしきを合せた上で渡さねばならない。札束は事務の量なので、ここでは「幸福」を買う道具にもならない。れは紙片にすぎないのだが、壱万円と印刷されてあったりするので、たいへんに神経が集中される。

同僚のNちゃんが、玄関の戸をしめながら、こんど誰かが来たら、これだと棒で打つ真似をしてふざける。それを見て男は笑った。しばらくして見ると、支所長の前の椅子に腰かけて話しをしている。男が帰ると、「家の中のごど持ち込まれるのは一番困るなァ……」と、支所長が言った。あまり親父に金を下げさせないでくれと頼んでいったというのである。

頼んでいった長男は、家で建具の仕事もやっているらしい。自分たちが働く分だけ、親父が金を借りてゆくので困ると。

困る主の金吾老人は、小型四輪車を運転してやってくる。腰がまがって歩くのもたいへんたし、自転車もたいへんたし、車の方が楽だと言って来ってくる。その車を始動させる時の蒸し方が、並ではない。事務所ぜんたいに蒸き渡り、誰しもが頭をもたげてしまう。

金吾老人は、ひんぱんにやってくる。生活費は

もちろん、納税その他、かス代農作業の費用までが、秋の収穫を見込んで、つまりは前借りとなる。

長男夫婦は、一銭も手伝ってくれないのだとこぼす。老夫婦に農作業は無理なのだろう。無理であれば、人を頼む費用も当然かかることになる。

長男に田畑を譲ろうとしたら、建具屋の長男はその田畑を売ろうとしたというのである。

「俺どががどして稼せいで持った田たがら…」と、金吾老人はいう。建具屋の長男には、坪いくらであるために、「土地」は値打ちがあった。金吾老人にとって、「土地」は、自分の全生涯の象徴であった。子どもたちを食べさせ、育てながら働きふやした水田である。売られてたまるかという思いが強く。

孫にバイクを買って与えるのだといって、その金も払い戻した。孫はバイクを乗りまわし、金吾老人の意志を継ぐとはかぎらない。だが、そうせずにはいられない金吾老人の所作は、あまりにもそこにもここにもある問題ではあった。つまり、「土地」の思想とは、定職の見えない幽霊ほどにも定まらないのである。

数日前、あの青年が表われた。背ビロをさらりと身に付け、カバンを持ち典型的な銀行家のスタイルで。金吾老人の次男だというその青年は、高財がいくらあるかと調べていったという。そしてあの長男もやはり同じように調べていったのだと。

金吾老人は寝たきりだという。そういえば、この春先から、車の音も聞かれなくなった。いよいよ財産あらそいかとも、みなは耳をそばだてる。そばだてた耳に、人は、「ある所だがらえんだ」と、まことに冷淡な結論を下す。事実、他人の家の財産あらそいなど、知ったことではないのだ。

が、金吾老人親子の問題をまた、「土地」の問題である限り、結論こそが物事の始めでなければならない。

（6頁より）にはじまり、NHKの『豊のしゅうたん』の秋田弁。『いちばん星』の山形弁。外国秀俊の小説は『北帰行』とつづくあたり、一つの線が引かれる用意があったのでしょうか。「北へ向って鳥はたつし」と、詩ったのは吉田一穂という詩人。「北へ向って新幹線はのびる」とは、国鉄の胸の内かもしれません。キャッチフレーズとはうたい文句。ましたは縦しは正体を失なう。引かれた新幹線にはこのようて、わたしらは石ころかとい　とうそ　お元気で〈R〉